トルコに投票します

――'20オリンピック（パラリンピックも）開催地

『国際オリンピック委員会』（IOC）設立（一八九四年（明治二七））から三〇回目・『大ブリテイン及び北アイルランド連合王国』（イギリス）に於いては三回目の近代（夏季）オリンピックが終わって三週間が経とうとしている（其の「姉妹競技会」とも云うべき「ストーク・マンデビル記念・国際身体障害者スポーツ大会」（パラリンピック）が同じ国家の同じ場所で一昨日（八月三〇日＝日本時間）から行われている。こちらは一九回目だが）。日本は七個の「金」（一位）を含め三八個のメダル（記章）を得、丁度一世紀前の初参加以来の記章獲得の記録を更新した。

「西亜細亜で初」の五輪

さて、次回のオリンピック（二〇一六年。パラリンピックも）はリオ・デ・ジャネイロ市を中心とするブラジル連邦共和国で行われるが、次々回（二〇二〇年）の開催を巡って、スペイン王国（主開催地…マドリード）・トルコ共和国（同…イスタンブール）と日本（同…東京）が最終候補として名を連ねている。開催地を決めるIOCの投票は来年（二〇一三）九月に行われる。

結論から言おう。「若し、オリンピックの開催地の決定について、投票権が世界の全ての成年者たる人々に在るならば（現実には記章獲得済の現役選手を含む数百人のIOC委員しか行使出来ないが）、**全日本共和党としては全党員を動員してトルコ（イスタンブール）に投票致します**」。――「西亜細亜で初めて・中東で初めて」のオリンピックの開催と成る事。是が第一の理由である。

3・11からの復興が優先

以下の理由は専ら国内事情に因るが――

第二に、昨年（二〇一一（平成二三））三月一一日の「東北地方太平洋沖地震」（以下、「三・一一」）からの復興に少なくとも一〇年は掛かる、其の真っ最中であり、併しながら其の復興も殆ど儘成らず、其の上、「三・一一」に拠る原子力発電事故の後始末も「石棺」の設置すら行われぬ―と云った状態だからである。――こうした中で同じ大共同体（＝国家）の首都と其の直ぐ周りのみで一時限りの「宴」が行われる、と在っては「三・一一」の被災地群・特に福島県内―壊れた原発が海岸部に在る―の住民達としては「腹糞煮え滾る」思いと成る事、間違い無かろう。オリンピックの開催で得られる金銭が被災地に一銭たりとも入らない事を考え合わせるなら、其は尚更だ。

スポーツは自己責任だ

第三に、例え「三・一一」〔級の大規模災害〕が起こらないとしても、日本と云う国家として優先してやらねば成らぬ事々が沢山在るからである。

此処で改めて考えるべき事は、スポーツが〔芸術も〕元来、「其をやらなければ人の生命に関わる（＝やらなきゃ死ぬ）行い」か否か、と云う事だ。――答えは「否」。オリンピックを目指す達は〔勿論、職業スポーツの選手達も〕、一つの競技に敢えて生命と金銭を賭け、時間も其に費やして傷だらけで其の競技に勤しんでいる。其は其で結構。但、其は飽く迄、自己責任の領域だ。元来は「やらなきゃ死ぬ」訳では無い・日々の生業で得られる「ゆとり」を活用して「楽しんでやれば良い」行いに「敢えて自分の責任で」生命等を賭け、傷だらけでやっているのだ。

そうした自己責任に拠る行いに掛かる金銭については、若し当事者（選手更にはコーチ・監督等）側で全てを賄い伐れないならば、後援者と成り得る〔民間の〕法人を見つけ出し、亦、其の競技に関心を持つが故に金銭を払って観客と成る人々にも呼び掛けて入場料を余計目に払って戴く―と云う行動を通して掛かる金銭を確保するのが「筋」と云うものだろう。本来は「楽しんでやれば良い」行いだから、其処には「好き嫌い」が必然的に生ずる。其の競技が嫌いな人々にとって、当該競技について公金（主に税金）が注ぎ込まれる、と在っては「馬鹿馬鹿しい」以外の何物でも無かろうし、況して税金が引き上げられるならば尚の事、「有志の娯楽に税金が使われやがって！…腹糞煮え滾る」思いに駆られよう。

とにかく、今そして八年後の日本〔と云う国家〕には、他の諸案件に優先させてでも「オリンピック」と云う「其をやらなきゃ死ぬものでは無い事を敢えて自己責任で行っている極一握りの人々が演ずる一時の宴」に数百億乃至数千億円を投ずるだけの「ゆとり」は無い筈である。

日本に於いてオリンピックを催す―飽く迄民間主導に拠り―のは、先ず「三・一一」から「復興した」と言い切れ且つ原発の事故現場から放射能が出る可能性が無い状態に至り、亦、国庫債券を新たに発行する必要が無いだけの財政が叶い、更に、スポーツ〔そして芸術〕に掛かる全ての金銭が民間有志で賄い得るだけの土台が根付いた確証が得られてからの話だ。

トルコは「亜細亜の一員」としての誇りを

付け加えて申せば、少なくとも地理的に「亜細亜の一員」であり亦帰依教国でもあるトルコ〔政府〕には、「亜細亜の一員」である事に誇りを持って戴いた上でオリンピックの開催を叶えるべく、次の事を要望したい。

其は、近代以来の「脱亜入欧」指向を見直し且つ改め、〔基督教国同士の組合的組織である〕「欧羅巴連合」（EU）への参加を諦め、亦スポーツに関して言えば先ずは、オリンピックと同じ閏年に行われる他の国際スポーツ大会の招致―「欧羅巴蹴球選手権大会」の招致を計画していると聞いている―を取り下げる事である。